

メンコの王さま

柏原兵三

絵 松井行正



メンコの王さま

柏原兵三 作

松井行正 絵



913

柏原兵三

メンコの王さま

講談社 1974

190p 22cm

(児童文学創作シリーズ)

かしわばら ひょうぞう

メンコの王さま

昭和49年 1月28日第1刷

昭和49年 第2刷(K)

著者 かしわばら ひょうぞう 柏原兵三

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 郵便番号 112

電話 東京 03(945)1111(大代表)

振替 東京3930

印刷所 株式会社 東京印書館

製本所 藤沢製本株式会社

製版 株式会社 まゆら美研

© 柏原悦子・柏原光太郎 1974 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

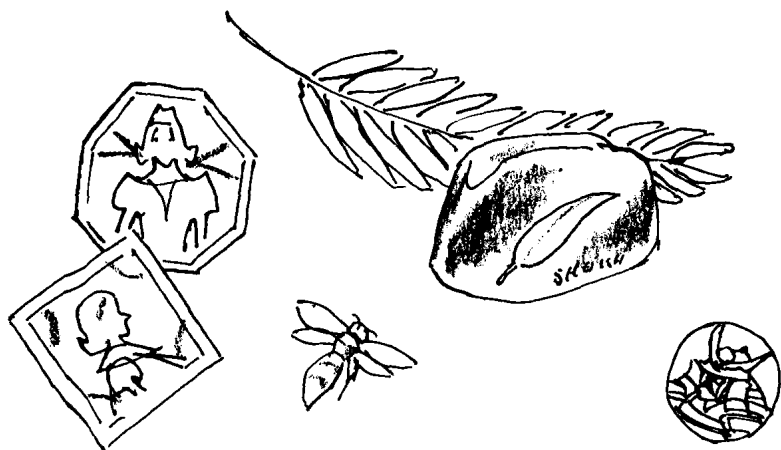
定価は箱に表示してあります。

メンコの王^{おう}さま

もくじ



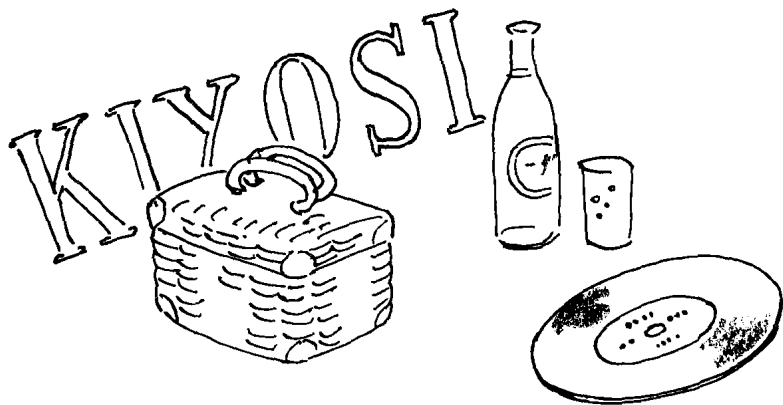
12.	11.	10.	9.	8.	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
歌 ^{うた}	音 ^{おん} 楽 ^{がく}	卒園式 ^{そつえんしき}	グローブリパン.....	ねむのき.....	齒 ^は の生 ^は えかわるころ.....	虎雄兄 ^{とらおにい} さん.....	蓄音機 ^{ちくおんき} の中 ^{なか} の小人 ^{こびと} たち.....	不安 ^{ふあん}	メンコの王 ^{おう} さま.....	飛行機 ^{ひこうき}	ふしぎな言葉 ^{ことば}
104	95	87	77	68	58	51	44	33	24	15	6



解説

柏原 兵三の世界………西尾 幹二

21.	20.	19.	18.	17.	16.	15.	14.	13.
ほん 本の世 界………	しょうらい 将来への夢………	いじん 偉人たち………	さといもの さといもの葉の水玉………	どうきゅうせい 同級生たち………	うみ 海への兄弟………	はちの巣 はちの巣………	べつ 別荘………	呪文 呪文………
179	170	162	153	146	138	130	122	113



装画・さし絵

松井行正

メンコの王さま^{おう}ま



かしわばらひようぞう
柏原兵三

1. ふしぎな言葉

幼児には言葉の意味を音で類推して理解する傾向がある。すくなくともわたしはそうだった。もつとも、そうやって意味を理解したもの、どうも現実とそぐわないいくつかの言葉が、わたしの幼年時代には存在した。それらの言葉は、幼年時代のかなり長い間、気がかりな、ふしぎな言葉として、わたしの意識の中に君臨しつづけた。しかしあるときひよんなことから、自分はそれらの言葉をまちがって理解していたのだ、ということが判明する。するとわたしは目からうろこが一片落ちたような気分を味わい、世界のふしぎの数々がわたしにとって一つ減少したことを知るのだった。



わたしは長いことポーナスをドーナツの一種を指す言葉だと解釈していた。母が友だちとの会話の中で、今年のポーナスは多かったとか、少なかったとか話しているのを聞くと、どうして大人たちはドーナツの多い、少ないをそんなに問題にするのだろうか、と奇異に思われてならなかった。

たしかにわたしはドーナツが好きだった。母は土曜日になると、よく子どもたちのためにドーナツを作ってくれた。まん中に穴のある、輪投げに使う輪のような形のこの菓子はわたしを魅惑した。揚げたあとすぐに砂糖をまぶせると、砂糖がきれいについてしまうふしぎ。——しかし大人たちは好きなときに、そのドーナツを作る力を備えているはずだった。メリケン粉と卵と砂糖と油と、それだけあればいつでも好きなときに、ドーナツを作ることができるわけではないか、それなのにどうして大人たちはそんなにドーナツの多い、少ないを問題にしなくてはならないのであろうか、それはわたしにとって解きたい一つのなぞであった。

あるときわたしは思いあぐねてポーナスとはなにかと母に問いただしてみたことがあった。ポーナスとはどんなドーナツかという種類の質問をすれば、母はきつと、わたしの

こつけない誤解を解いてくれたにちがいない。しかし母はわたしがボーナスをドーナツの一種と解しているとは夢にも知らないのだった。彼女はやさしくこう説明してくれた。

「お父さまが毎日お役所にいらっしやるでしょう。そのごほうびにお役所が下さるものよ。」

この答えはわたしの疑問を氷解させた。わたしは自分の解釈が正しいことを、いまやこの母の説明によって確認しえた、と考えた。

わたしは母が台所でドーナツを作るのを油のはねない安全な位置からよく見物した。しかしときどきわたしのいない間に、ドーナツができてあがっていることがあった。たとえば、わたしが家にてつだいがわりに来ている父のめいの多鶴さんと散歩に出たり、昼寝をしたり、子どもべやで遊びに夢中になっていたりしている間に作られたドーナツを、食べさせられることがあった。そんなときわたしは、これこそ父が役所からほうびにもらったボーナスにちがいないと心ひそかに解釈した。

父は当時鉄道省（運輸省）の役人をしていた。貨物運賃の改正にとりくんでいたらしく、よく父の話の中に、「運賃が上がる」とか「運賃が高くなる」という言葉が出てきた。わ

たしは「運賃」は「ウンチ」を意味する言葉にちがいないと心ひそかに解釈していた。そしてどうしてウンチの値段が高くなるのか、ふしぎに思った。しかしウンチが上がれば、貧乏なくみとり人はきつと金持ちになって幸福になるにちがいない、とわたしは解釈し、くみとり人のために祝福しないではいられなかった。

株屋という言葉も、わたしにはどうも現実との整合のうまくいかない言葉だった。夏の夜など、父はよく母と散歩に出た。そんなときわたしもいっしょに連れていってもらえることがあった。するとかならずへいを高く長くめぐらせた家の横を通った。あるときこのへいに沿って歩きながら母が父と交わした会話から、わたしはこの言葉を知った。

「この大きな家はどんな人のお住まいかしら。」

「株屋らしいな。」

「まあ、やっぱり。」

わたしは株屋というのは、かぶ（蕪）を売る人のことであると解釈した。そして世の中にはみょうなことがあるものだなと思った。なぜ、かぶだけ売るとこんな大きな家に住み、にんじんやだいこんやじゃがいもなどを扱つと、うちのやお屋さんのように小さな家に住

んでいなくてはならないのだろうか、と思つたのだ。

かぶを売ればこんなに大きな家にはいれるならば、あのやお屋さんも早くかぶだけに売
るものを統一してしまえばいいのだ、ひよっとするとやおさんは、まだそのことを知ら
ないでいるのかもしれない、とわたしは思つた。それでわたしは、やおさんが御用聞き
に来たときに、聞いてみたことがあつた。

「どうしてやおさんはかぶだけ売らないの。」

「今はかぶの時期じゃないんですよ。」

と、やおさんは見当はずれの答えをした。

ある朝わたしは、父が母に洋服を着るのをてつだつてもらいながら、

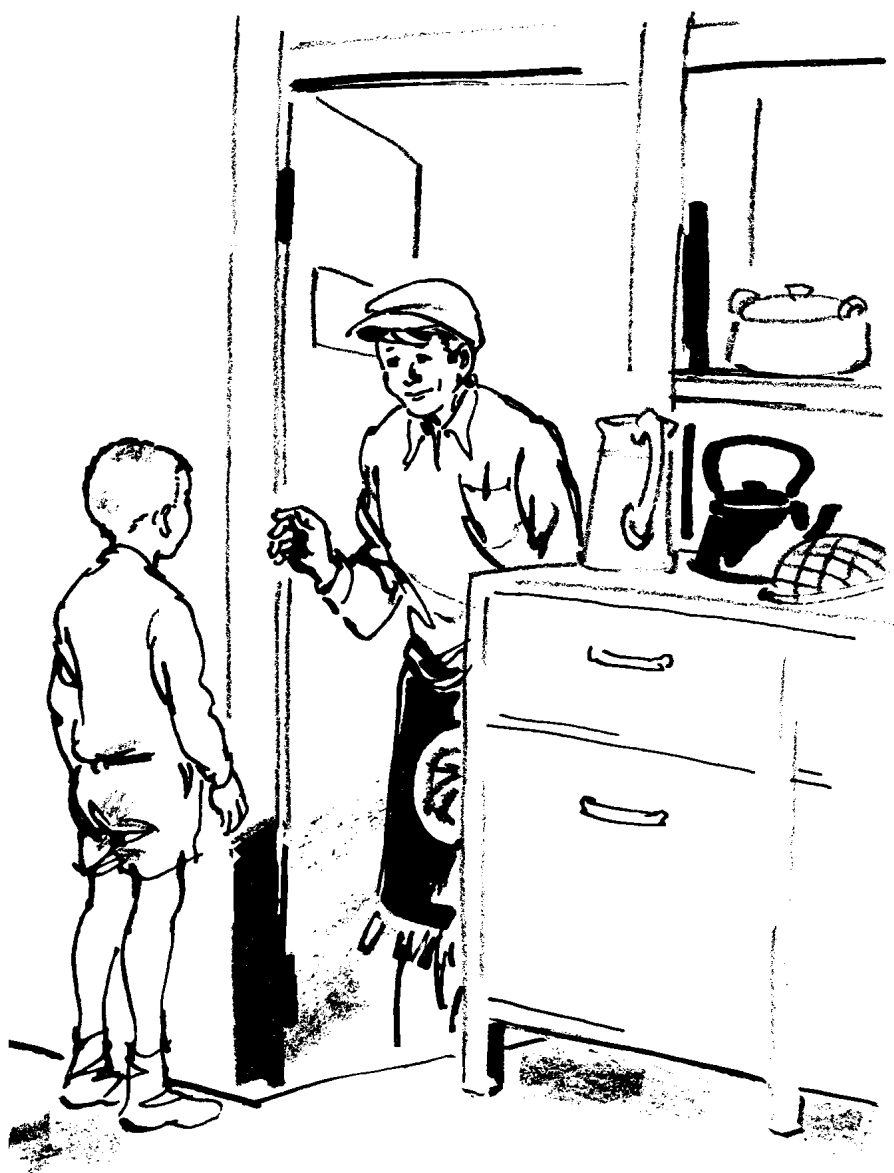
「おれは首を切られるかもしれない。」

といって、手で首を切るまねをしているのを見たことがあつた。

「まあ、どうしましょう。」

と、母がいった。

「なんとかなるだろう。」



と、父がいった。

その日からわたしは憂いに沈むようになった。大人の世界ではまだずいぶん残酷なことが生きているものだ、と思った。そして父が首を切られたら、わたしたち家族はどうなるのだろう、と思った。しかしいつまでも父が無事でいたので、やがてわたしはこの苦しみからのがれることができた。

わたしは「行商」という言葉を覚え、一度それを適当な機会をとらえて使ってみたく願った。それが商人の一種を表す言葉であることを、わたしは知っていた。それだけ知っていれば、わたしには充分であつた。

父の郷里から、なにかの用で父の義弟が上京してくるようになった。彼は二、三日わたしの家に滞在するはずだった。彼は肥料の間屋をしていた。わたしは彼の上京を楽しみに待った。「行商」という言葉を使える機会が到来したのだと思ったのである。

いっしょに夕飯を食べながら、わたしは質問する機会をじつとかがっていた。

「御商売のほうはいかがでいらつしやいますか。」

と、母が質問した。

「まあまあですわい。」

と、おじは母の使^{つか}うていいいな東京言葉^{とうきょうことば}が苦手^{にがて}のように、ぼそぼそと田舎弁^{いなかべん}で低く答^{こた}えた。

「おじちやまの家は物を売^うっているんでしょう。」

と、わたしは質問^{しつもん}の矢^やを放^{はな}つた。

「そうよ。」

と、母が答^{こた}えを引き取^ひつた。

「おじさまのところは大きな肥料^{ひりょう}の問屋^{とんや}さんをしていらっしゃるのよ。」

わたしは母の説明^{せつめい}に取り合^あわないで先^{さき}を続^{つづ}けた。

「それじゃあ、おじちやまは行商^{ぎやうしやう}をしているんだね。」

母が困^{こま}つたように訂正^{ていせい}した。

「おじさまのところは大きな問屋^{とんや}さんですよ。」

「いや、行商^{ぎやうしやう}だよ。」

と、わたしは自信^{じしん}をもって答^{こた}えた。

おじは困ったような笑いを浮かべて黙っていた。——このおじは、若いころ裸一貫で村を飛び出し、北海道へ渡って働き、さまざまな苦勞をなめたのち、大きな肥料問屋にまでのし上がった男だったが、実際に北海道でかなり長いこと魚の行商をしたことがあったのである。そのことをわたしはずっとあとで知った。

翌日、わたしは母からひどくしかられる羽目に陥った。意味もわからないで言葉をやらに使うものではありません、といってしかられたのである。